

# 鎌倉仏教と『涅槃経』

——親鸞聖人・道元禪師・日蓮聖人を中心にして——

関 戸 堯 海

私も真宗学会の一員として登録させていただいております、教誌の『親鸞教学』を常々拝読させていただいております。日頃から大変興味をもたせていただいているのですが、また今日は特に、聴講の皆さんの真摯な態度に大変感動しております。つい先頃、立正大学の日蓮教学研究でも他から講師の先生をお招きして、講演会をやったことがあるのですが、その時に、うちの学生の何人かが結構大騒ぎしまして、おしゃべりがひどくて先生の話が聞こえないくらいになってしまいました。それにひきかえ、今日の皆さんの素晴らしい態度に感激しました。今日ははりぎつて来たわけなのですが、ひとつ拙い話ですがお聞きいただければと思います。

特に日蓮聖人といえば過激だと皆さん認識してらっしゃるのではないかと思うのですが、実は過激なことばかりではない、というようなことを今日は覚えていっていただければいいと思います。前置きは長くなるのですが、いろいろ考えてきたことがあるので話させていただきますと、今回、素晴らしい真宗学会で発表させていただける機会を得ましたのは、実は三明先生から「私の順番が回ってきて、もう一人必要だから来てください」と言われまして、馳せ参じた次第なのです。実は、十数年前だと思っておりますが、高野山大学で印度学仏教学会があったのですが、その折

に恵心僧都源信の『一乗要決』と日蓮聖人の著作についての研究発表をしたことがございます。今でこそずうずうしく京都の大谷大学にまでこさせていただいて、皆さんの前で、また専門の先生方の前で、親鸞聖人の涅槃経引用はどのこののとこれから述べる訳なのですが、当時はまだ初々しくございまして、初めての発表だったのです。当時は修士課程から発表が出来る状況にございまして、修士課程に入ってから初めての発表だったのです。ですから、やつのことで発表を終えたとたんに、三明先生から「信心について日蓮聖人はどういう風に考えているのですか」と、今でもよく覚えているのですが、この質問を受けまして、その時はあがりっぱなしでございまして返答できずに弁慶の立往生になってしまったのです。そのうちに司会の先生が今後の課題として終わりにして下さって、難を避けた訳なのです。まったくそういう恥ずかしい状況がありまして、その後立正大学ですとか、身延山大学の先生が集まってきました、「関戸君、日蓮聖人の信心とはこれこれ、こういうものだよ。」などと、たくさんさんの指導をして頂きました。そうか！ ということで懇親会に出ましたら、三明先生もいらっしゃいましたので、先程はすみませんでしたということ、それ以来『親鸞教学』『宗教研究』『印度学仏教学研究』等に掲載された三明先生の論文を拝見させていただいて、ことあるごとにいろいろ意見を交換し合うというようなお付き合いをさせていただいてきたのです。

先程、神戸先生からご紹介いただいたのですが、私は現在、日蓮聖人の『註法華経』の研究をしています。それはどういふものかといいますと、法華経の版本、法華経を印刷したもの、春日版ではないかと考えられているのですが、その行間、天地、あるいは、裏に日蓮聖人がいろいろな経論疏から抜き書きしたものを書き込んでおられるのです。先程の三明先生のお話にありました、涅槃経要文について大変興味深く聴かせて頂いたのですが、それと同基軸とも言えますが、日蓮聖人の引用経論全般に亘る研究に進んでいるのであります。涅槃経に關しても、親鸞聖人、道元禪師と共通するような項目があるように認識しているのですが、「要文」すなわちいろいろな経典から抜き出してきてメモをとって、それを執筆に役立てるといふようなことが、当時一般的に行なわれていたことなのではないかと

いう感觸もあります。それはどういふことかといえますと、しばらく前に新聞で拝見したのですが、親鸞聖人の自筆の「覚え書き」があつて、『続高僧伝』『浄土論』から道緯の伝記を抜粋して、日本の年号に換算した年表を付けています。それが『教行信証』執筆の資料となつたのではないかと考えられています。他にも比叡山で研究していた僧にはそのようなものが残っていました、いろいろな經典などをいろいろな所へ行つて調べて、それを書き写して、主要な部分を自分の手元に置いて執筆にあたるというようなことも、鎌倉時代の僧侶の研究方法の一つではなかつたのかというような感觸もあります。この『註法華經』に取り組む以前には涅槃經の研究を大学院入学以来ずっとおりました。思い起せば高野山の印度学仏教学会の帰りだと思つたのですが、現在の立正大学の学長の渡辺宝陽先生が「やっぱり涅槃經だよ涅槃經」とおっしゃるのです。どうもどこかの部会で真宗の先生が涅槃經の発表をしていたのを聞いてきたような感じでした。高野山へ行くときは言つてなかつたのに、帰りになつたら涅槃經、涅槃經とおっしゃっていたので、それが契機となりまして、ある程度、形にすることができました。『日蓮聖人遺文涅槃經引用集』です。日蓮聖人の遺文(著作、手紙等)の中に引かれている涅槃經を一通り調べることができました。浅井圓道先生の『法華品類日蓮遺文抄』に続けて出版させて頂くことができました。先程三明先生のお話の中で涅槃經が『教行信証』の三分の一を占めるとありましたが、『日蓮聖人遺文』の全体からするとさほど多くはないでしょうが、その役割といへば非常に重要なこともあります。その出版は要するに涅槃經のどの部分が出てきているかというデータだった訳で、それを基に研究論文を執筆したのですが、修士課程以来ずっと書き蓄めていたものが『日蓮聖人教学の基礎的研究』なのです。今日これから話させていたたくのもその内容にもとづくものでございます。大谷大学の図書館にも一冊あるそうですが、親鸞聖人の『教行信証』の中の涅槃經引用もリストアップさせていただいておりますので、もし興味がある方は図書館へ行つてごらんになつていただければと思います。

そもそも日蓮聖人といえますと、法華經ということになると思つたのですが、いろいろ調べてみますと、涅槃經につ

いても重要な思想を見出すことができます。そこで涅槃經を調べてみたのですが、その頃ご健在でありました田村芳朗先生から「日蓮宗だけに限っているような狭い料簡じゃいけない。もっと幅広く見てごらん下さい。鎌倉時代全体とおっしゃいますので、田村先生のご指導が契機となりまして、道元禪師そして親鸞聖人との涅槃經引用の接点というものを調べてみました。

ところで、私事で恐縮なのですが、父が早く亡くなりまして、現在は母が住職をしています。実は、その母が新潟県の新井の出身なのです。もともと門徒さんなのです。私も祖父母の法事に行きますと高田からお上人がみえられまして「あっ君東京から来たんだね、これ読みなさい」などと言われて「正信偈」の本を渡されまして、一緒に、法要に参画させていただくというでもあります。三明先生もいろいろ気になさって下さっていますが、日蓮宗には古来から、同座諷經、他宗派の人達の法要には一緒に出てはいけないとか。法華經を信仰していない人に布施してもいけないし、布施をもらってもいけないというようなことがあります。これを不受不施義と言いますが、あまり極端ではいけないように思います。特に、日蓮宗では、四箇格言とか南無妙法蓮華經と唱えていなければならないことばかりが先行して、他の宗派の方々がどのような教学を打ち立てているか意に介さない人もあるような気がします。念仏批判の問題も話させていただきましたが、法蔵菩薩の第十八願は、真宗教学においては重要なキーワードになってくると思います。しかし日蓮宗ではあれは真宗の弱点だ、念仏の弱点だ。それだけだと思っただけではないでしょうか。その辺がやはり他の宗派のことを勉強しなければいけない点であって、そういうところをどんどん勉強して補強していくことが重要でしょう。逆に日蓮聖人に対する他宗の方々の印象については、過激な他宗批判と強烈な生き方ばかりに注目されがちなのですが、日蓮聖人はとてもやさしいお心を持った方でもあります。例をあげますと、女性に対する手紙です。お子さんを早く亡くされた女の方に対する手紙には素晴らしいものがあります。本当に相手の気持ち

をくみとって死んだ子が今ここに生き返ってくるような気がするのです。本当に心をうつのです。それからお酒のお礼。日蓮聖人がお酒を飲んでいたことは確かなのですが、誤解していただきたくないのは、現在のように度数の強いお酒ではなく、非常に弱いお酒なのです。それがいわゆる薬酒なのです。親鸞聖人も流罪と言ってもいいと思うのですが、越後等に流されてご苦労された訳なのですが、日蓮聖人は真冬の佐渡に流されて、そこで非常に体の具合を悪くされたのです。ですから、晩年は身延山、山梨県の身延山で生活されたのですが、お腹の具合を悪くされたのです。ですからそのことを心配して信徒やお弟子さん達が「はじかみ」（生薬のようなもの）などのいろいろな薬を持ってきて下さるのです。その中の一つにお酒がございました。それは非常に度数の弱いもので体を温めるような役割をはたしていたといわれています。そのお酒に対するお礼でも「身延の山は本当に冷え冷えして何もかも石のように冷たくなって雪も降り大変な寒さです。ところがこのお酒を一滴飲めば体が温まってお湯のなかに入ったようであります。」とお述べになります。そういう手紙を受け取った人はどう思いますでしょうか。薬酒をお送りして良かったなあと思う訳なのです。そのような非常に心の暖まるような面もあったということを記憶していただきたい。更に親鸞聖人は劣機の凡夫の救済を稀求されましたが、日蓮聖人も罪深き私たち凡夫が救われるにはどうしたらいいかということに第一の主眼があった訳なのです。日蓮聖人はいろいろ迫害にあっている訳なのですが、その点について、実は前世において、法華経修行者の首を切ったりしていたという御自身の過去世の罪についてふりかえっているのです。だから本当は地獄に堕ちるところが、現世において法華経を信仰していることによって、罪が減ぜられて、迫害という形になったという「罪の認識」が特に最近指摘されています。これは茂田井教亨先生の『開目抄講讀』に滅罪の問題が提起されていて、それ以来研究が進んでいる段階でございます。

それでは、鎌倉新仏教と涅槃経という問題について、親鸞聖人、道元禪師、日蓮聖人を中心に述べさせていただきます。親鸞聖人、道元禪師、日蓮聖人それぞれがおのおのの特徴的であり、教義は、まったく正反対な方向

を示しているのは御承知のとおりです。一方で鎌倉時代という同じ時代を生き抜かれた訳ですから同様な基盤があるのですが、その点についてちょっと見てみたいのです。ただし三者の異なる方向性について、今日は申し述べませんので、同じだということばかり強調するような形になりますがお念仏、お題目、それから座禅というまったく違った方向に宗教的な救いを求めていらっしゃる祖師方が、実は同じような基盤をもっていらっしゃるということを知っていたのだと思います。まず共通する基盤という問題について「生きた時代」を考えてみたいと思います。ほとんど、同じ時代に親鸞聖人、道元禅師、日蓮聖人が生きておられます。そうなりますと、同じ時代なのに、どうして宗教的な方向性が変わってきたのだろうと感じられます。非常に興味ある問題なのですが、西暦でみますと一一七三年に親鸞聖人がご誕生になる。そのすこし後の一一九二年に源頼朝が征夷大將軍になる。そして一二〇〇年には道元禅師がご誕生。一二〇一年には親鸞聖人が法然上人のもとにご入門になりました。一二〇七年には念仏禁止令。親鸞聖人は法然上人門下ともども越後に流される。このような出来事がありまして、やがてすぐあとに承久の乱という天下大騒ぎの乱がございまして、その翌年に日蓮聖人が誕生してらっしゃいます。さらに一二二三年あたりになりますと、道元禅師が、宋に入りまして、禅の奥義を求め。これがどうも親鸞聖人と日蓮聖人に対して、道元禅師の涅槃経受容の着目点のちがいであるのではないかと思えます。建長五年、一二五三年になりますと道元禅師が亡くなっています、その年に日蓮聖人がお題目の宗派の樹立を宣言したのでございます。弘長二年、一二六二年には親鸞聖人が亡くなっておられます。大変ご長命で道元禅師より先にお生れになったのに、後まで長くご存命でありました。一二七一年には日蓮聖人が佐渡に流されています。そのあと一二八二年には日蓮聖人が亡くなっておられます。ほかにも重要な用件はあると思うのですが、以上によってとにかくお三方がほぼ同じ時代に生きたことがわかると思います。鎌倉幕府が創立されてしばらくたち、だんだんいろいろな仕組みが崩れていくような時代であった、ことに承久の乱のような大きな混乱があったのです。また迫害というと日蓮聖人というイメージが強いのですが、よくよく調べてみ

ますと、親鸞聖人も大変な思いをされていますし、道元禪師も比叡山の攻撃を避けて越前へ行かれています。日蓮聖人は大きな難では四回と言われていますが、文永八年には幕府から蒙古がいつ襲来するかわからないのに、世の中を騒がす存在は危険だと認識されて佐渡流罪と決まったのですが、実際どこに連れていかれたかと言えば、首切の刑場だったのです。佐渡流罪という名目のもとに、実際は殺してしまおうという状況だったのです。雷が刑場におちて侍の刀が三つに割れたという伝説があるのですが、実際の所、弟子や信者の中で幕府の中樞と関係のある方が働きかけて、首切の刑は中止され元の罪名通りに佐渡に流されたのです。このように三者とも同時代に生き、やはり同じように宗教的な問題から迫害を受けています。もう一つ認識していただきたいのは『立正安国論』の冒頭に「牛馬巷うままたに斃なほれ、骸骨路みもに充みてり」とあって、その辺に牛や馬の死骸、そして人の亡骸が転がっているような惨状について述べられます。当時の鎌倉では地震、飢饉、疫病の流行などがあって大変悲惨な状況であったといわれます。親鸞聖人が京都にいらっしやった時にも災害があったと伺っておりますが、そのような危機的状況にあったのです。ルワンダにも自衛隊の方々が行ってらっしやいますけれども、教会の中に鉄砲で撃たれたような亡骸がごろごろ転がっているという虐殺の様子を見ましたが、まさにそのような悲惨な状況であったと思います。ですから、形式ばかりにこだわっている比叡山の宗教でいいのだろうかというような懸念が祖師方であったのではないのでしょうか。

また親鸞聖人のことを日蓮聖人が知っていたのだろうかという問題があります。どうもご存じなかったようです。今ですとマスメディアが発達しておりますので、親鸞聖人ほどの方ですと当然宗教者として知らない訳はない。しかし日蓮聖人の著作等の中に親鸞聖人のことは出てまいりませんので、まあご存じだったのか、ご存じなかったのかは、知る手がかりはありません。日蓮聖人の遺文の中には、法然上人、あるいは同時代の鎌倉にいらっしやった証空上人などの方々に対する言及はあるのですが、残念ながら、親鸞聖人のことはでてこないと思います。道元禪師も一時期、鎌倉にいらっしやったことがあったのですが、日蓮聖人はその頃比叡山に勉強にいらっしやりました。このお三方に交流

があったりすれば、面白かったと思います。親鸞聖人に関しましては、『教行信証』という素晴らしいものがあります。道元禪師も、『正法眼蔵』という特徴的な著作がありますので、日蓮聖人と比較してみようと考えたのですが、実際お三方が直接交流を持ったことは恐らくなかったのではないかと思われるのです。

次に共通する基盤の第二点としまして「比叡山での研修」があげられると思います。そして比叡山の仏教の墮落とということが取り上げられましょう。『教行信証』に「聖道の諸教は行証久しく廃れ」とあるように、混沌とした状況だったのではないのでしょうか。日蓮聖人も比叡山の仏教に対しては批判的です。ただし比叡山での研修というのを考えてみますと、親鸞聖人は横川の常行三昧堂とご縁があった。幼い頃から比叡山で過ごされて、二九歳の時「雑行を棄てて本願に帰す」と、法然上人に付き従われたということでした。同じく道元禪師は、横川的首楞嚴院に二二三年頃におられました。日蓮聖人は横川の常光院に、一二四二年頃。だいたい同じような時期に比叡山で勉強しています。その点で宗教的な方向性の違いは比叡山の問題にあるのではないのでしょうか。比叡山でどのような信仰が生まれ、法要が行なわれていたか。例えば清澄山で、日蓮聖人は出家されて以来勉強をしておられたのですが、そこは横川系の天台念仏をもっぱらとするとも言われています。そこへ、日蓮聖人が諸国遊学を終えて戻ってきまして、お念仏ではダメです、法華経のお題目を唱えましょうと言ったので、信徒さん達は怒ってしまい清澄寺を追い出されてしまいました。当時は一般的に法華経の思想的な価値が重要視されていた一方で、いろいろな諸尊を拝していたようです。そして当然お念仏も盛んであった。しかしそういうところで勉強した人の中には、どうも中途半端な感じを持った人もあったのではないのでしょうか。このような現状ではダメだということで、祖師方ががんばられた結果として宗教的に異なった個性を持つようになったのではないのでしょうか。法華経と念仏の混在する当時の天台教学の問題がよく指摘されます。法華経を誦読しつつ念仏を唱えるという清澄寺等の状況に対して日蓮聖人が疑問をもったのではないかということが言われます。ところで『教行信証』行巻の一乗海釈をめぐる勝鬘経の引用と法華経の一乗思想と

の問題があると思いますが、どうも『一乗要決』を接点としているのではないかとも思われます。この点については八木昊恵先生の『恵心教学の基礎的研究』あるいは神戸先生も『一乗要決』「大文第七」と『教行信証』との関わりについて論じてらっしゃいます。一乗海釈ですが「一乗」というと私達は法華経をすぐ思い浮かべますが、勝鬘経をお使いになっています。この辺に何かキーポイントがあるような気がします。また道元禪師はどうかといいますが、『正法眼蔵』では鏡島玄隆先生が『道元禪師と引用經典・語録の研究』の中で詳しく調べてらっしゃいますが、法華経を重視しています。しかし、経の内容の浅深勝劣はあまり問題としないようです。この辺に法華経の教理内容は確かにいいのだが、それが末法の凡夫、劣機の凡夫の救済に役立つかどうかというのは別問題というような立場と、日蓮聖人のようにやはりすばらしい最高の教義書である法華経でなければダメというように別れていったのではないでしょうか。

ここで、日蓮聖人の念仏批判の構図について述べたいと思います。これこそ法華経をどう位置付けるかという点においての法然上人との見解の相違だと思おうのですが、日蓮聖人の場合は法華経に衆生救済の道を見出していますので、やはり法華経が最高にくるのです。しかし、法然上人の『選択集』を見てみますと、法華経を聖道門に位置付け重要視することはないと思えます。翻って法華経譬喩品を見ますと、法華経を粗末にすることは大変重い罪である、という一節がありますが、日蓮聖人はその一節に特に注目しているのです。さらに法華経を粗末にすることは無量寿経に説く法蔵菩薩の誓願「ただ五逆と誹謗正法を除かんとす」という重要節句との矛盾点があるのではないかと批判するのです。法華経を粗末にすることは誹謗正法にあたると思われるのです。『教行信証』でも第十八願は劣機の救済を見出す上での非常に重要な役割を果たしています。だから私も今日改めて感じたのですが、日蓮宗側の一方的な見方ばかりでは、解決しきれない問題もあるとも思いますが、日蓮聖人はとにかく法華経を大事にしなければならぬことを強調するのであります。このため、法然上人は法華経よりもお念仏を大事にしているので、日蓮聖人は四箇格

言と称されるような過激な他宗批判をなさいます。この点で強烈な印象を他宗の方々々に与えていると思いますが、そうではなく、とても冷静な部分もありません。例えば『立正安国論』を先の執権の北条時頼に差し出した折りも禅宗に対する批判は避けています。それは時頼が宋から蘭溪道隆を招いて帰依していたことを考慮して禅宗の批判を避けて、お念仏一本にして論点を絞ったということもあります。『立正安国論』は内容的には浄土系の方を刺激する面があるのは確かですが、日蓮聖人は『立正安国論』を見てみんなが怒るのを待っていたのです。そして幕府の公の機関で各宗派と対論して論破しようと考えていたと思われるのです。このため内容的にはかなり過激な部分もありますが、結果として北条時頼は『立正安国論』自体を無視しています。ところが内容ばかりが世間に流布しまして、日蓮聖人の他宗批判ばかりが知られるようになったのではないのでしょうか。その『立正安国論』の中に『選択集』が引用されていますので、日蓮聖人も『選択集』を読んでいたことがわかるのですが、法然上人のこういう考え方は、まあこういうだよという風に論じているのです。このように日蓮聖人の念仏批判の構図は『立正安国論』を中心にして構築されているのですが、一方では法然上人も親鸞聖人も比叡山で研鑽して仏教の奥義を究めて、更に一步進んで、それまでの宗教ではダメだとお念仏の宗教を樹立されたのではないのでしょうか。そして日蓮聖人もやはり法華経が一番だ、法華経に依らなければ救われないという立場から法華経を聖道門と位置付けたり、時機不相応と見做すような法然上人の主張に対して疑問を投げ掛けているのであって、揶揄、中傷のたぐいではないことを心にとどめておいて頂きたいと思えます。

次に迫害について考えますと、日蓮聖人ばかりではなく、親鸞聖人も法然上人一門の弾圧に伴って越後に流されました。また道元禪師も迫害という形ではありませんでしたが、比叡山からの圧迫が強くなって自ら難を避け越前に行きます。日蓮聖人は伊豆に流罪になりましたり、佐渡流罪など、命に及ぶような迫害もありました。やはり同じ宗教者として厳しい時代を生きて、そして迫害を受けて、流罪の目にあっているようなことも共通項として指摘できるか

と思います。まず状況的な共通項を以上に指摘しましたが、次に末法の問題を考えてみたいと思います。

これはしばしば取り上げられる問題で、今更語るところではないかもしれませんが、やはり末法という時代が背景にあつて、重要な役割を果たしたのではないかと思ひます。親鸞聖人の『教行信証』をみますと、「已にもつて末法に入りて六百八十三歳なり。」等々とあり、阿弥陀仏の本願こそ末法の世を照らす光明であり、阿弥陀仏の慈悲は三世をも超越するとても読み取れるでしょうか。親鸞聖人の場合に強調されるのは正法とか像法とか末法という時代性よりも、時代を越えた阿弥陀如来の救いの世界であると考えて良いのではないかと思ひます。また『正像末和讃』を拝読しますと

#### 末法第五の五百年

この世の一切有情の

如来の悲願を信せずは

出離その期はなかるべし

と、末法の第五の五百年に対する言及があり、また

像末五濁の世となりて

釈迦の遺教かくれしむ

弥陀の悲願ひろまりて

念仏往生さかりなり

ここで像法と末法を同じように考えてらっしゃいます。末法という時代を認識しつつも、その捉え方は、末法を強調したり、像末一緒に考えたり、更にはそれを超越する阿弥陀如来の慈悲という問題として捉えたりという面があるかと思ひます。

次に道元禪師はどうかといえますと、時代は気にしないというのが一般的にいわれていることでございます。『弁道話』に「大乘実教には、正・像・末法をわくことなし、修すればみな得道するといふ」とあって末法であつてもなくても真の仏法は他人から教えてもらうのではなく、自己に内在する仏性を実現させることであると読み取れますよ。うか。時代を超越していると考えられるのですが、最近では駒沢大学の石川力山先生の論文などを拝見しますと、道元禪師も末法といえますか、当時の社会に対する時代的な危機感はあるかと思つたと考えられるそうです。そして、日蓮聖人はどうだったかといえますと、ことさら末法という時代性が強調されます。

『教機時国鈔』を見ますと「仏教を弘めん人は必ず時を知るべし」とあつて、末法こそ永遠なる積尊の本意である法華経が弘まるべき時である。末法にこそ、法華経が広まるという立場にありまして、末法の問題を非常に重要視されました。また『教機時国鈔』には「妙法蓮華経、広宣流布之時刻也」という表現もあります。ちなみに『末法燈明記』は『教行信証』にも引用されていますが、日蓮聖人も最澄の真撰と考へて引用されているようです。このため『周書異記』や『末法燈明記』が仏滅年代あるいは、末法の算出において、非常に重要な役割を果たしております。ただし現在は『末法燈明記』は最澄の著作ではないと考えられています。

当時の悲惨な状況から考えますと、一般の民衆に求められていたのは明確でわかりやすい教ではなかったでしょう。うか。称名念仏に關しましては、もとよりその特徴を顯著に示していると思ひますが、道元禪師に關しましても只管打座であり、日蓮聖人は南無妙法蓮華経とお題目を唱えなさい、これらがそれぞれの特徴でして、どれも教えの明確さを示していると思うのです。平安時代の仏教は貴族の教養として珍重される教理的な仏教といつていいと思うのですが、『源氏物語』などを拝見しますと、法華経を読みながら阿弥陀如来の軸を掛けるという記事もありますし、法華八講は非常に重要視されますが、鎌倉時代になりますと、現前にある民衆の苦悩をなんとかして乗り越えていかなきゃいけない、それをリードしていくのが、宗教者であつたのです。そのような時代だからこそ仏教伝来以来ような

くとして仏教本来の意義が達成されることになったといえるでしょう。そこで要求されるのは「わかりやすさ」だと思います。こうみてきますと『選択集』にあります「難行易行」「聖教雜教」が思い起こされます。しかし、家永三郎先生は「日蓮は法然の亜流だ」とおっしゃるのですが、これは日蓮聖人も一般の人にわかりやすい信仰のあり方を示すことを目指したことに注目しての意見だと思いますが、それはただ念仏を真似したのではないのです。このような議論と同様、真言宗には、日蓮聖人の曼荼羅本尊は真言宗の金剛界・胎藏界の曼陀羅を真似したものだという意見もあります。しかし日蓮宗のお曼荼羅はお釈迦さまの法華経の永遠の説法の様子を文字で示されたものでございまして、お題目の宝塔に相対して日蓮聖人、あるいはその周りに書いてある阿闍世などの諸尊は向こうを向いている立体的な様相を象徴するものなのです。

更に教えの明確さが要求される背景には天変地異の問題があると思います。寛喜の頃の京都の飢饉、建保・正嘉の頃の鎌倉大地震、洪水などに苦しむ一般の民衆が救いを求めていたことを第一義に考えていかなければならないでしょう。

以上のような様々な問題点を念頭に置いた上で親鸞聖人・道元禪師・日蓮聖人の涅槃経受容について考えてみたいと思いますが『教行信証』『正法眼蔵』『日蓮聖人遺文』とも後半の「高貴徳王品菩薩品」「師子吼品」「迦葉菩薩品」からの引用が多いという特徴があります。それは悉有仏性論などの涅槃経の重要思想と関係すると思われる。涅槃経は三段階に分かれて成立していったと考えられますが、最初は一闍提等の仏性を否定する段階、次はだんだん一闍提の成仏の可能性を認めて、最後に悉有仏性論を展開して、一闍提にも仏性があり成仏することを認めます。それを反映していると考えられますが『教行信証』『正法眼蔵』『日蓮聖人遺文』とも涅槃経の後半からの引用が多いのです。また『教行信証』『日蓮聖人遺文』に共通する特徴としては「聖行品」「梵行品」の引用が多いことがあげられます。

「梵行品」には有名な阿闍世王の説話が出てきますので難治の機、救いがたき機の問題が、着目される点となっています。

るようです。更に『日蓮聖人遺文』だけの特徴としましては「壽命品」「金剛身品」「如來性品」という前半の引用が多いことがありますが、これらの各品には「正法護持」の思想が説かれます。正法を布教するためにはどのような態度であるべきかについての説示でありまして、これは『立正安国論』にも引用されています。涅槃經では正法を護るためには刀や杖を持って異端者に対して反撃でもいいと説かれますが、涅槃經を引用しつつ日蓮聖人は「涅槃經が説くのは過去世のことであって、現在では法華經を信仰しない人にはお布施をとどめるなどの平穩な手段で対抗していったら良い」と言っておられます。涅槃經の前半では正法護持の思想が顯著にでておりますので『日蓮聖人遺文』ではそれを引用するという場合が多いのです。

ここで南本と北本の問題を考えてみたいと思いますが、おおむね『日蓮聖人遺文』は北本、『教行信証』は南本によっていると考えられます。布施浩岳先生が『涅槃經の研究』の中でインド仏教と中国仏教研究の立場から涅槃經の北本と南本の字句の異同を調べておられますが、その成果と日蓮聖人の涅槃經引用を照合してみるところ北本の傾向が強かったです。さらに厳密に調べますと宮内省図書寮本に一番近いというような感触を得ています。また親鸞聖人と道元禪師についても照合してみましたところ、『教行信証』は布施浩岳先生の示した特徴の南本の方に該当いたしました。親鸞聖人や日蓮聖人の当時どういう涅槃經が流布して一般に読まれていたかというような課題も生じるかと思えます。

ここで『教行信証』と『正法眼蔵』と『日蓮聖人遺文』の共通項について考えてみます。詳しくは拙著『日蓮聖人教学の基礎的研究』九四頁の対照表を見て頂きたいのですが、『教行信証』の涅槃經引用はたくさんありますが、『正法眼蔵』と『日蓮聖人遺文』とに關係の深いものについて述べますと、現病品の「難治の三病」、梵行品の「阿闍世の説話」、師子吼品の「一切衆生悉有仏性」、迦葉菩薩品の「善星比丘」「菩提の因は信心」「信不具足」について着目すべきと思われます。『教行信証』の化身土巻と『日蓮聖人遺文』に共通する壽命品の「無上正法の付嘱」と如來性品

の「仏滅後の正法の滅尽」については『末法燈明記』を介した引用ですので別に考えるべきかと思えます。そこで問題となるのが迦葉菩薩品の「善星比丘」ですが、『正法眼蔵』では善星が断善根であると知りつつも、出家をゆるす釈尊の大慈大悲に着目した上で、善知識に親しむべきことを説いています（出家功德）。『教行信証』では釈尊が善星を断善根だと見抜いた上で、あえて出家させて善因を植え付けたことを強調し、一切衆生悉有仏性を明確にします（真仏土巻）。そして日蓮聖人は善星比丘の有様を一闍提有仏性の例としてあげます。悪知識に親しむべきでないことを善星の説話から見出しているのですが、特に日蓮聖人の場合は一闍提成仏の問題が強調されます。『開目抄』には「提婆達多は一闍提なり、天王如来と記せられる。涅槃經四十卷の現証は此の品にあり。善星・阿闍世等の無量の五逆謗法の者、一をあげ頭をあげ、万ををさめ枝をしたがふ。」とありますように、涅槃經の教えも法華經の「提婆達多品」の提婆達多の成仏に集約されるのであり、善星や阿闍世の成仏もそこに見出せるというのです。結局は法華經の「提婆達多品」の悪人成仏の教えに集約されるとみるのがここでの日蓮聖人の涅槃經受容の特色です。涅槃經の教えも法華經の中に収めつくされるとみるので、涅槃經を「落穂拾い」と位置付け、法華經を補足するとみりますが、悪知識、あるいは善知識の存在をどのように捉えるかという問題について涅槃經を引用しているという点で、着目すべき共通項なのです。

次に師子吼品の「一切衆生悉有仏性」ですが、これに関しましては先程三明先生が詳しく述べて下さいましたので、申し上げるまでもないのですが、『正法眼蔵』を見ますと非常に独特な読み方をしております。「悉有は仏性なり。悉有の一悉を衆生といふ」と読むようですが、普通はこのようにには読みません。「悉有は仏性なり。悉有の一悉を衆生といふ」と読み替えまして、全存在が仏性なのであって一切衆生がそのまま仏性であるというふうに捉えていると考えていいかと思えます。涅槃經をご自身の視点に従って読み替えるということは日蓮聖人あるいは『教行信証』の中にも見られることですが、このように発展的に捉えるというのは『正法眼蔵』の一つの特徴だと指摘できると思

います。次に『教行信証』ですが、「信心」を中心としつつ一切衆生悉有仏性義を劣機の凡夫の救済へと具現化する  
ことを目指しているといえましょう。特に「仏性は大怒大悲・大信心である」という一節を重視している点に、その  
特徴が示されていると思います。「信巻」「浄土和讃」等にその引用の特徴を見ることが出来ます。さらに『日蓮聖人  
遺文』を見ますと、末法の凡夫は燠種（焼いた種のように仏性が芽吹く可能性がない）とみて、法華経への「信心」  
すなわち題目を唱えることによって新に仏種が下されると考えます（下種）。一切衆生悉有仏性義を認めつつも、現  
実に世の中を見回してみると私達凡夫に、仏様になる可能性が確かにあるとは思いたくない。それでは救われないのか、  
どうしたらいいのだという課題から法華経のお題目を唱えることによって、その成仏の種が下されるとみるのです。  
天台教学を基盤にしつつも、現実在即して展開しているのが非常に特徴的なのです。ちなみに室町時代に日隆上人と  
いう方があったのですが、下種とは法華経のお題目を唱えることによって信心が下されることだと主張したのです。  
日蓮聖人の宗教は「自力」を強調する点でよく知られていますが、日隆上人の主張はきわめて「他力」に近いものと  
いえます。このような考え方はきわめて浄土教的要素を感じさせるものですが、日蓮宗の歴史の流れの中のある一時  
期には信心が下種されるというような考え方もっていた方があったのは確かです。

さらには謗法・五逆・一闍提の難治の三病が共通項として指摘できます。そして阿闍世王の問題です。神戸先生が  
お詳しいのですが、『教行信証』では阿闍世王が重要な役割を果たしています。他力の信によってのみ救われる罪深  
い悪人とは難治の機である凡夫であって、法蔵比丘の第十八願にこそ弥陀の大悲が込められており、弥陀の回向信心  
によってこそ凡夫の救済が達成されるのであります（信巻）。しかし『正法眼蔵』には阿闍世王の説話はどうも見当ら  
ないようでございますが『日蓮聖人遺文』を見ますと、これはまた非常に重要な役割を果たしています。重罪を犯し  
た阿闍世王こそ罪深き末法の凡夫であるのとみるのです。阿闍世王は靈鷲山での法華経の説法の会座にあり、法華経の  
「序品」に阿闍世王の名前が登場するので法華経を確かに聞いていた、ということがまず第一のポイントとして認識

されますが、最後の説法（涅槃經）に際しては阿闍世王に法華經の教えが重ねて教示されたこととみるのが日蓮聖人の特徴であります。涅槃經をお読みになった方はご存じだと思っておりますが、阿闍世王が耆婆に導かれてお釈迦さまのところへ行って聞いた説法は「身の二十事」などの教えであって、法華經の教えを重ねて説いたとは書いてありませんが、日蓮聖人は涅槃經の説法で阿闍世王が法華經の教えを再び釈尊から説き示されたという認識に立っているのです。この辺に涅槃經の教えも法華經の中に組み込まれるという立場が鮮明にできています。それが『開目抄』の「提婆達多は一闍提なり、天王如来と記せられる。涅槃經四十卷の現証は此の品にあり。善星・阿闍世等の無量の五逆謗法の者、一をあげ頭をあげ、万ををさめ枝をしたがふ。」という言葉に集約されると思っております。また『撰時抄』は晩年のご著作ですが「靈山会上の砌には闍浮第一の不孝の人たりし阿闍世大王座につらなり」とあって、阿闍世王が法華經を聞いていたことを確認しています。さらに『可延定業御書』では「仏、法華經をかさねて演説して、涅槃經となづけて大王にあたへ給しかば」とあって、法華經を聞いていたことを確認しています。さらに『可延定業御書』では「仏、法華經をかさねて演説して、涅槃經となづけて大王にあたへ給しかば」とあって、法華經の教えを重ねて説いて、それを涅槃經と名づけて阿闍世王に与えたという受けとり方をしておられます。これは極端な例でなく信憑性の高いご遺文には同様なことがみられます。

次に迦葉菩薩品の「菩提の因は信心」「信不具足」の問題です。これも今更申し上げるまでもありませんが、阿闍世如来は第十八願に至心・信楽・欲生の三信をおこすことを誓っています。凡夫の得道の真因は信心であることを明らかにします。そこで涅槃經を引用して信心こそが仏性であることを説くのです（信卷）。また名号を聞き一念の信心をおこして往生できるのは弥陀の本願力回向によるものとして、菩薩經の「聞不具足」を引用しているのは信卷の信一念釈です。更に化身土巻には仏道の妨げとなる「邪見」を克服し菩提に至るためには信心こそ根本の因であることを明らかにしています。

日蓮聖人は機根の劣った凡夫であっても法華經を受持することによって成仏の道が見出されると主張しておられますが、『四信五品鈔』をみますと「慧又堪えざれば信を以て慧に代う。信の一字を詮となす。不信は一闢提謗法の因、信は慧の因・名字即の位也。」とあって、機根の劣った末法の凡夫は難しい法華經、あるいは仏教の教えを理解する能力がないと位置づけられます。しかしそのような凡夫であっても法華經に対する信心によって初心の行者と同等な出発点に立つことができるということが説かれています。以上見てまいりますと、特に親鸞聖人と日蓮聖人を対比して考えてみますと、根本的視座に理解能力の劣った劣機の凡夫の救済の問題があったと思われるのです。それは当時の混乱した社会状況や、一般の民衆のレベルにまでやっと到達して、仏教本来の意義を發揮できるような時代になっていたことを示すのではないのでしょうか。十数年の時を隔てて三明先生の質問に対する答えになるようですが、劣機の凡夫という課題を克服するキーワードは言うまでもなく親鸞聖人は信心、阿弥陀如来に対する信仰のあり方であると思うのです。一方で日蓮聖人は經典の中でも最も最高に位置づけられる法華經の教えを信仰して、その教えに帰依していくことを高らかに宣言するのです。妙法蓮華經という法華經のタイトルの中に法華經の功德が全て収められているとみて、その経題を唱えれば難しい仏典のことを理解できなくても、まず第一歩を踏み出すことができるかと捉えているのです。こういった相違点の根本には、親鸞聖人には法然上人という素晴らしい師があったのに比べ、日蓮聖人は師たるべき師と結局出会わなかったということがあると思います。清澄寺で出家した時の師匠が道善房という方なのですが、結局日蓮聖人が法華經の宗派を開くと宣言した時に、道善房は念仏の信仰者であった地頭の東条景信に逆らえず、日蓮聖人を破門し追い出してしまったのです。そのため日蓮聖人はやむなく鎌倉に布教に行くのです。比叡山で勉強していた時代には俊範という比叡山の総字頭とも会ったこともありましたが、俊範の話聞いた学生の一人ではあったかもしれませんが、その人が法華經のお題目の修行を教えてくれた訳ではありません。それでは誰に付き従ったのだろうかということを考えた時に涅槃經がでてくるのです。涅槃經には「依法不依人」（法に依りて人に依

らざれ」という一節がございまして、日蓮聖人はその一節に出会われまして「ああ、これだと」お思いになったと考  
えられるのです。涅槃経の「依法不依人」の教えによってより所とすべきは法華経であるとの確信を得て、「正法」  
である法華経に帰依するという宗教を樹立されたのです。このような点が親鸞聖人と日蓮聖人の涅槃経受容のあり方  
を知る上でのもっとも基礎的な部分ではないかと思うのです。